



# ピクタインザウシ

(おきあかりこぼし)

第2号

発行日 2015年8月9日

発行人 矢代 レイ

秋田市御野場7-1-29-305

## 春の雪

仏送りの日 母は桜のあかるく咲く絵の前にいた

黒く四角いかたちの中で

やさしいまなざし

翳は白かった

かなしみの裏側で

わたしたちは 記憶の川をさかのぼり

刻まれた言葉にただよう香りを

一片ひとひら 母にとどけていた

うす紅色の視界がひろがる空に

母が透明な光となつて

のぼつていく

ゆくゆくはわが名も消える春の雪\*

世寿 九十七歳

戒名 花詠清佳大師

\*母の句

# 惜別

——  
母に

## I

吹雪の夜

……不意の電話

母の死

かなしみは 海鳴りの激しさで

胸の汀に打ちよせる

母は北向きに眠っていた

凍った蠟人形のように

しるく 光っていた

記憶にとどめたくて

何回もさわる

とじたままの目

半開きの口 へ

## II

葬儀当日

おだやかな乳白色の光がさしこむ

(いまは死ねない

寒くてみなに迷惑をかけるから

火葬場に飾られた遺影

の前の遺骨

漂白された小枝のような 灰白色

海に沈む白サンゴのような 生成り色

生きていた証しがごっそりぬけ落ち

細く 薄っぺら……

目の前に

右手の人差し指？ へ

冷たい額

心のなかの石の重さがとりはらわれて  
やすらかな顔で



母よ

わたしの詩は

あなたの心をしずめましたか

あなたの寂しさをすいとりましたか

あなたのいのちに灯をともしましたか

繊細なオブジェのような

舞いおちた雪片のような

そっとさわっても崩れそうな

その指は天井をさし

(まっすぐに生きなさい)

母の最後のメッセージ

たったひとりの母をこわさないように

左手の箸で

ゆっくり

ひろう

母よ

わたしは

あなたの記憶を書きつづける

あなたは詩のなかに生きる

やわらかく

# 【高橋よしえ句集】

水無月俳句会合同句集『偕老』より

(平成3年1月19日発行)

## 「粗筵」

昭和60年

小豆干す陽を追いて干す粗筵

帰国する娘の文ひろぐ秋燈下

夕べより色つき染めしななかまど

コスモスの丈より低く老いにけり

たそがれの道なりえごの狂い咲き

実むらさきの色を濃くして姥ざかり

昭和61年

春塵の空をまともに沼の面

列なして湯島社頭の梅日和

数知れぬ絵馬の重なり木の芽晴

虎杖の揺れては見える父母の墓

現世や拾う人なき杉落葉

救急車の音遠くして夕端居

どくだみは母の面影ふくらまず



亡き父母をいま身に沁みて茄子の紺

水ようかん四角に切つて丸く食う

炎天の路地匂わせてペンキ塗る

旅の野に疲れをいやす花芙蓉

夢のつづきに凧鳴りてまた眠る

日脚やや伸びしと思ふ夕厨

冬苳食う匙ひかり誕生日

地吹雪や訪う人のなく訪うもせず

雪囲い外し仏間の埃見ゆ

### 昭和62年

行きずりの言葉やさしく春の雪

髪乱す風の中なる山桜

荃立を摘んで夫の忌日なり

スーパ一の梅雨の傘立あふれけり

きりもなき家事ひと区切り立葵

炎天や村が小さくなりにけり

黍嵐昼を灯して鎮を打つ

父がいて母もいるらし彼岸寺

ささく来て冬に近づくすわり胼胝

錠剤の彩とりどりに秋桜

手の節の荒れを見ており鬼胡桃

もの言うに似たり口あく寒の鯉

なんとなくわだかまりあり隙間風

借物の男ぐさくて冬帽子

寒鱈のえらにくい込む縄の瘤

白に笠伏せたる父をふと思ふ

### 昭和63年

引越しの荷がとどく梅七分咲き

咲き揃う葎の花なり友の葬

淡雪の記憶をたどるかたわ爪

葉桜や老に不向きなドアの鍵

傘をさすほどでもなくて夕牡丹

朝顔の萎む刻きて訃報聞く

見廻りてもとの菖蒲の前に立つ

ひまわりのうなじの青し偏頭痛

かたくなになりし齢やねじり花

母の忌に思い出尽きぬ菊脛

首じわのかくせぬ齡吊し柿

工事灯の点滅早し遠花火

嬰兒負う紐のゆるみて花木槿

寄進板の墨痕うすれ竹の春

たたまれしままの夕刊日脚伸ぶ

言いそびれしまいて帰る冬のばら

山の湯の細帯ゆるむ寒椿

誕生日早目に灯す冬厨

大寒や葬りの細きネツクレス

平成元年

草の芽のほつほつ嬰兒歩き出す

花冷えのガラスに残る指の跡

ひとりでに首に手のゆく別れ霜

紫木蓮家事を残して旅に発つ

諏訪の湖風にやさしきリラの花 (諏訪の旅)

茶臼のあとかたもなく花なすな (諏訪の旅)

夕映えのぶらんこを漕ぐ兄いもと

祭壇を解きてぼつかり四葩かな

史を秘める大杉仰ぐ夏帽子

腰おろす石のぬくもり遠花火

ななかまじょうやく喪の気うすれけり

漁火の見えかくれして稲架襖

戸を繰ればマルメロ匂う夕まぐれ

がわがわと合羽が歩く冬仕度

日短かや窓と時計を見くらべて

胸ポタンかけ違えたり冬の朝

鏡餅女所帯に慣れにけり

枯枝に雨滴きらめく万華鏡

胡麻豆腐の胡麻のさざなみ冬の海

糸通す針孔めどの向うの雪光る

平成2年

竹行李に記憶ふくらむ春の雪

なしのつぶての文待つや二月尽

さまさまの別れありけり春の駅

一人暮しに気兼はいらぬ桃の花

漬樽に酢の香のしたる木の芽どき

老僧の袂ふくらむ萩の風

ずり落ちる老眼鏡の残暑かな

起きぬけに畑見るならいちちろ鳴く

霧の中尾灯について行く尾灯

用無しのぶらぶら歩く菊日和

父の忌の間近になりて残り菊

闇せまる家路の背なに冬の雷

冬ごもり煎じ薬の煮つまれり

なんとなくわだかまりあり寒の鯉（鈴木氏の解説より）  
傘をさすほどではなくて夕牡丹（鈴木氏の解説より）

〔解説より〕

海程・合歓同人合歓茅集選者

秋田県現代俳句協会副会長 鈴木 鴻夫

高橋よしえ かつての女流に金沢寿美子がいた。  
彼女の俳句は生活俳句が少なかった。宗道家だったからか尖鋭で心理的な作品が多かった。こちらはその金沢寿美子とは対照的に生活を前面的に押し出して表現する女流特有のきめ細かい心理を見せながらである。六十年会員だから俳歴は五年、しかしこの人何処でどう捉えたか独特のリズムを身につけた。それが九十句発表に繋がったのであろう。

なんとなくわだかまりあり寒の鯉

傘をさすほどではなくて夕牡丹

作者にとつては心のリズムであり、読者はこのリズムに乗せられ肩が凝らない。さらに句股がりを導入しつつあり、これが見に付けば二物衝激と言う技法に手がとどく。水無月俳句会女流の先達になることを期待する。

ささくれて冬に近づくすわり胼胝

糸通す針孔の向うの雪光る



『自選句集・昭和六十一年』（秋田県俳句年鑑）より

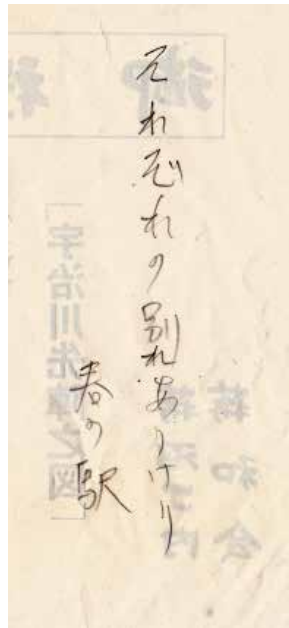
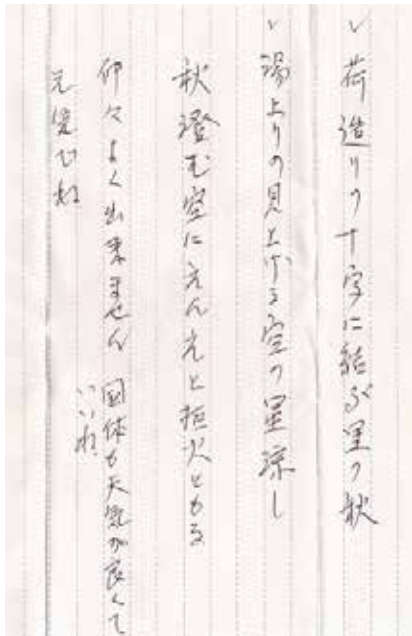
（昭和62年7月1日、秋田県俳句懇話会発行）

百千の絵馬重なりて木の芽どき  
梳く髪の風にあそべる五月かな  
虫干やかすかに母の匂いせり  
汗ばみし眼鏡を洗う昼の川  
水ようかん四角に切つて丸く喰う  
地下足袋の鞋たしかに秋深む  
秋しぐれ宿るつもりの腕枕  
耳鳴りて話ちぐはぐ山粧う  
錠剤のいろとりどりや秋桜  
堅雪を渡る近きに墓ありて

『自選句集』にはさまっていたメモより

それぞれの別れありけり春の駅  
荷造りの十字に結ぶ里の秋

湯上りの見上げる空の星涼し  
秋澄む空にえんえと拒火ともる





水無月俳句会合同句集『偕行』（二十周年記念）より

（平成9年4月10日発行）

「冬ごもり」

盆梅のいろを尽してこぼれけり

ゆくゆくはわが名も消える春の雪

盲いたる人に諭され春障子

打身痠われにもありて春りんご

花冷えや指に巻きとる躰糸

地湿りに膝つき直す花薙

色物の衣の裏干し五月来る

たんぽぽの絮に託して嫁さがし

蒲公英や旅の疲れのふくらはぎ

ひと叢は杜若なり南無阿弥陀

振花針穴に糸ままならず

満天星の千の鈴振る風の中

てんぷらのパクッと揚がる今朝の秋

秋の蚊に仏頂面を刺されけり

聞き役の欠伸こらえし秋灯下

ままならぬ身の衰えや合歡の花

花芒何とはなしにあるきだす

蠟燭の点るがごとき木守柿

年寄りの踵ざらつく冬隣り

俎板の傷のもろもろ冬に入る

泥の手を洗う落葉の水溜り

人の死の忽と来にけり冬の雷

やすらぎの一人歩きや大枯野

ふにおちぬひと言のあり懐手

冬ごもり左右ことなるたなごころ

数え日に訃の重なりて身のほとけ

寒の水顔を小さく洗いけり

漬物石の傾きにけり春隣り

闘病の友くる寒のゆめまくら

きさらぎや小物そろえて旅に出る



\* \* \*

平成10年7月4日

九十を過ぎてもをんな桃の花 (秋田魁新報社賞)

平成19年7月7日

春耕や鋤の重さに齢を知る

(第39回県南俳句大会、横手市議会賞)

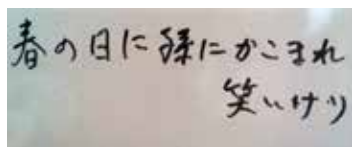
平成19年頃?

老ゆるとは縮むことなり蜘蛛の糸

囀りや校外に散る豆画伯

平成23年4月10日

春の日に孫にかこまれ笑いけり



遺作 (平成27年3月12日に見つけたメモより)

食はあれどベットの早春を待つ

夢のつづきも見ずにや明易し

音もなく滴の止まず雪間雫

(ひとひ) 一日一日天井を見つめ何思ふや死後のこと

逝く日の安らかに願ふ給うや神々に

癒えねども生きるよろこび年重ね

除雪車に目覚めたり降雪知る

風仙花触れてはじける反抗期

## 花詠清佳大姉

〈大意〉

花があり実のあるあなたは

また内実ともにすぐれた詩句を

つくられる方であつた

その生涯はきよらかでまっすぐであり

すぐれた人格で人生を全うされた

戒名は龍泉寺のご住職がつけてくださった。  
俳句を愛した母の、誠実な人となりが分かる名前だと感謝している。

高橋よしえ（本名ヨシエ）

大正七年九月八日―平成二十七年三月十一日

所属 水無月俳句会・合歓、のち退会



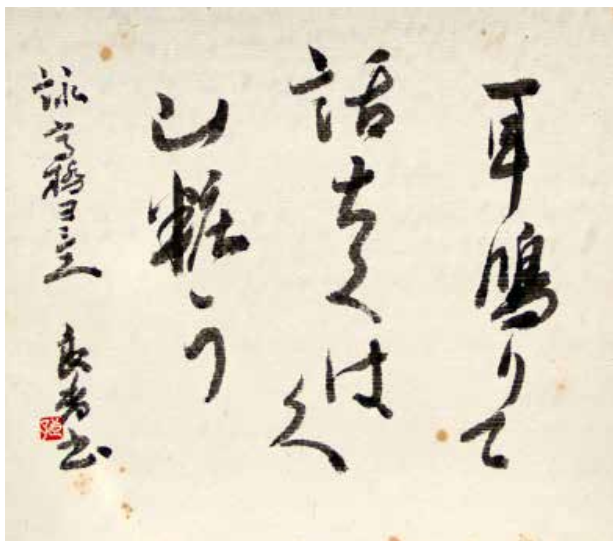
写真は、水無月俳句會で昭和六十三年長月に浅舞公園に建立した句碑と母。

指さしているのは、母の句である。

コスモスの丈より低く老いにけり

『自選句集・昭和六十一年』の句から

耳鳴りて話ちぐはぐ山粧う



【あとがき】

この号は、三月十一日に亡くなった、母の特集とした。死後、手元にあった作品をまとめてみた。驚くことに、母娘ゆえか、視点が似ているのである。母にとり俳句は、感情の歴史そのものであった。

母と俳句の出会いには、「平鹿町高齢者大学俳句会」であり、六十歳と遅いスタートであった。午睡している母の枕元には、いつも分厚い歳時記とノート。俳句を書きとめたメモ用紙が、花びらのように散らばっていた。

かなりの作品があったと思うのだが、この一四九句以外は残されておらず、残念である。

平成十九年頃の作と思われる二句は、私が昨年七月十五日に携帯にメモしていたものである。

三月十二日に見つけた八句は、亡くなる少し前の作品に思える。後で推敲しようとメモしたのだろう。遺作となってしまった。

きつと今頃は、四十四年ぶりに父と逢い、昔話をしているのではないだろうか。

合掌

